

「壊された私たちの美しい図書館・歴史資料館」

4月1日、武雄市図書館・歴史資料館がリニューアルオープンした。開館早々、両館への来館者は多く、例年になく賑わいを見せている。3月末、オープン前の内覧会に参加したが、以前に比べ館内外の華やかさには驚くというより情けなくなってしまった。

それは私たちの静かで美しい図書館が、書店・喫茶店・DVD・CDコーナーに一変していたからである。想像はしていたが、“ここまでやるか”という感じである。

ところで、市内のあるご婦人からファックスをいただいたので、ここに主な内容を紹介しておきたい。

「私は頻繁ではありませんが、図書館で少しだけのんびり、ゆっくり、時を止めて、本を読み、自分を見つめ、子どもや孫のこと、家族のことを考え、そして、少しだけホッとします。特に何を讀みたいではなく、目についた本を手に取り、思いかけずに深い言葉に出会い、その言葉に支えられたりします。子どもや学生さんを見かけると、思わず「しっかり勉強してね」とエールを送りたくなります。図書館は、そんな気持ちにさせてくれる空間でした。孫も、夏休み、冬休みは、毎日のように図書館で宿題をしていました。図書館と聞くだけで、無条件で安心して送り出せました。これからは、素直に喜べないでしょう。大人の責任として、子供たちを守り、これからの武雄図書館を見守り続けて行こうと思います。」(会宛てに、同趣

旨の電話を複数いただいている。)

静かなコメントだが、心うつメッセージである。子どもたちへの眼差し、本との出会い・そこから学び育つ一人の市民の姿が見えてくる。私たちの美しい図書館・歴史資料館は、このご婦人のように市民一人ひとりのユーザーに支えられていたのである。

今から、この人たちはどこに行くのだろうか？私は、このメッセージをいただいた時、あらためて私たちの会の仕事の大切さ、両館を市民の手に取り戻す道筋をつけねばならないと強く感じたのである。

近年、高度情報社会の中で、MLA連携が求められている。博物館(museums) 図書館(library) 文書館(archive)を相互に結びつけ、社会的記憶装置として共通性・重要性が議論されるようになった。武雄市図書館・歴史資料館はその二つを先取りした複合館で、文書館を付加すれば MLA 連携が見事に成立する先進的取り組みであった。

特に地域主権・地方自立の時代を迎え、地域情報を収集・整理し市民に提供していくことは、内発的市民力を醸成していく上で欠かせない MLA の仕事であった筈である。

さらに、行政の説明責任・情報公開・透明性を担保していくためには、文書館に行けば全ての行政情報が手に入る、そのような環境を行政が創ることで初めて、地域主権・市民協働のまちづくりが始

まるのである。そのようなことは、一切議論されずに私たちの美しい図書館は、東京の指定管理者の手に渡ってしまったのである。

2

1月、熊本駅前の熊本市立図書館を訪ねた。その4階＝ワンフロアがビジネス支援センターで、キャリア学習をする若者の熱気が溢れていた。終身雇用が非現実化する中で、若者はいつもキャリアアップを求められているが、そのニーズに市民図書館が応えているのである。各市町の図書館のあり方は、その町の未来を志向していると思うが、わが町はどちらを向いているのだろうか？

あらためて生活の中に在る、身近な読書環境（公民館や学校など）についても、再確認し評価していただきたいと思う。

今回の武雄市の図書館問題が、一部マスコミや新自由主義的研究者などに表層的レベルで評価され、財政困窮化に向かう地方自治体に伝播する事を恐れている。

※この原稿は、佐賀県内の子育て・教育関係者のネットワーク誌に書いたものです。

武雄市図書館・歴史資料館を学習する市民の会

代表世話人 井上一夫